「全ての子どもの学習権を保障する学校」を出発点に
～「『ゆたかな学び』としての学校づくり」研究委員会報告～

平野　智之　（同研究委員会委員長　　追手門学院大学）

「ゆたかな学び」としての学校づくり研究委員会は、11 月までに 6 回開催された。菊地栄治所長は、教育内容の「個人化」と現場での「管理化」が進む中で、教職員当事者の支えになる「足場」を創ることを本委員会に求められた。第２回の大空小学校元校長木村泰子委員からの報告は、まさに「足場」を築く土台となるものであった。「地域の全ての子どもの学習権を保障するのが学校である」という当然の理念と、その実現のために「見えない学力」を「見える学力」の上位に置き、「地域に開かれた学校」作りを進めてきた言葉は、現場の教職員に気づきと励ましを与える力を感じさせた。そこには、子どもや親が抱える「とまどい」や「不安」を、クラスや教員個人の枠を超えて学校全体としてうけとめる作風と、そのうけとめの先に見える「子どもどうしの力」への教員の信頼があった。木村委員は、教員の「本音」「弱み」を仲間にさらけだし、共有することで、子どもに向き合うことを求め「みんなの学校」を作ってきたのである。

大空小学校の、クラスや教員個人の枠にとらわれない組織づくりは、第３回で報告された、大阪府立松原高校が地域に根ざす学校を掲げ、全員担任制を採用して学校あげて進めた人権教育や、中田正敏委員による神奈川県立田奈高校の「廊下での対話」「オンザフライミーティング」による学校づくりと通じるところがあった。教科や分掌の閉鎖性がより強い高校現場を例に、「組織の壁」を超える可能性が議論された。

第４回で、油布佐和子委員は、教員として背負わされた「同調圧力」や「管理の眼差し」から、どうやって「現場の文法に応じた実践者」に変容を遂げるか、その方法について問題提起を行った。倉石一郎委員からは、現行のシステムに内包される「包摂こそが排除を生む」構造にあっては、「包摂的実践の担い手」の美化を慎み、現場で日々経験される制御できない「ままならなさ」を引き受ける「知られざる実践者」の姿に光を当てたいと意見があった。大空小学校の報告にあったように、教員が「弱み」をさらけ出す時にこそ、「ままならなさ」を引き受けて変容しうる「実践者」が生まれるのではないか等、教員の変容をテーマに議論を深めた。

大空小学校の実践にあった「子どもどうしの力への信頼」を裏付けたのは、第５回の旭川市立忠和中学校からの報告であった。小学校まで分離されていた障がいのある仲間に対して、「特別な存在」から「あたりまえの仲間」として受け入れる子どもたちの姿が伝わってきた。その報告を受け、池田賢市委員は、「子どもから学びを奪わない」ことや「自己責任（個人モデル）に陥らない」ことを指摘し、「学力（基礎学力）」の批判的検討の必要性もテーマに上った。

以上のような各委員の話題提供から、今後の見通しとして、組合員の実践と悩みをテーマに現場と委員との対話を試みながら、本委員会として、確かな「足場づくり」のために現場に届く言葉を模索していきたいと考える。